

## ラクダの去勢

### 内モンゴル自治区アラシャー盟のクダ牧畜民事例から

ソロンガ（千葉大学人文社会科学研究科）

ユーラシア大陸からアフリカ大陸にかけて去勢ラクダは騎乗用、荷駄用として歴史的、社会的、文化的に重要な役割を果たしてきた。本発表の目的は、ラクダの去勢技術を中国内モンゴル自治区アラシャー盟のラクダ牧畜民の事例から明らかにすることである。具体的には、去勢の時期、去勢畜の選別、一連の去勢作業、術法、儀礼および社会関係に着目する。

牧畜社会において搾乳技術と並んで、牧畜という生活様式が成立するうえで重要であるもう一つの技術がある。これは去勢である。去勢という現象は、モンゴル、トルコ、ネパール、エチオピア、ウガンダ、セネガル、アラビア、北ケニア、イタリア、シベリアなどほぼ全ての牧畜社会においてみられる現象である。そこで、地域ごとの放牧・飼育している家畜種および牧畜の形態によって去勢という牧畜技術は異なる。

モンゴル牧畜民は、五畜といわれるラクダ、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギを群れとして放牧し、季節に応じて宿営地を移すという様式で牧畜生活を営んできた。牧畜民は家畜とともに移動しながら、春から冬までの間に家畜の出産、焼印・耳印、毛刈り、去勢、交尾、屠畜といった様々な牧畜作業を行う。とりわけ、去勢は牧畜作業の中で非常に重要な作業である。すなわち、去勢という行為は種オスを選定する行為と密接に関係するものである。種オスの選定は毎年の去勢作業の時に実施するのは一般的である。種オスを選定し、種オス以外のオス家畜を去勢することは家畜を群れとして管理する時に重要な意味を持つ。

つまり、去勢は家畜管理にとって重要な技術である。一方で、去勢された個体の肉質が良くなり、肥育もよくなり、体力も強くなることから個体の食糧と畜力としての利用価値が高まるという利点がある。この意味では、去勢は家畜の利用価値を高める機能的な技術とも言える。

アラシャー盟では、牧畜民はラクダの去勢をタイラグ・アタラハ (*tailag atlah*) という。タイラグとは3歳のオスラクダを指す。家畜の去勢はその家畜種によって去勢する時期と個体の年齢が異なる。調査地であるアラシャー盟では、4月初旬から中旬もしくは10中旬にラクダを去勢する。3歳のオスラクダに施すのはほとんどである。では、なぜラクダは3歳の時しかも春か秋の季節に去勢されるのかと言えば、3歳を過ぎるとラクダの体が高くなり、力も増えて、人間の命

令にうまくしたがわなくなるからである。そして、3歳より若い時にラクダを去勢すれば、個体の成長に悪影響するからである。3歳のオスラクダが去勢された後、タイラグからアタ (*ata*)、シネ・アタ (*shine ata*)、ジャル・アタ (*zaluu ata*)、ホゲシン・アタ (*hogeshin ata*) というように名称が変わる。

現地調査によると、アラシャー盟ではラクダの去勢技法として3つの技法がある。切開せずに内部の精索だけを叩き潰す無血去勢法と、切開して睾丸までを取り出す出血しやすい去勢法がある。また、麻で作った糸を用いて、睾丸の根元を縛っておく去勢法もある。そうすると、睾丸が自然に脱落する。現地の牧畜民のほとんどは二番目と三番目の去勢法を用いる。ヤギとヒツジの場合は、去勢した睾丸を食用する習慣があるが、ラクダの場合は食用しない。ラクダを去勢した後、その睾丸を畜柵や生きている灌木に掛けておく。牧畜民はこれらの技法を用いてラクダを去勢する際に、一世帯の労働力が足りないため、近隣の牧畜民と親戚の協力を求めることは一般的である。

キーワード ラクダ 去勢 技術